

乳幼児・幼年教育の専門誌

昭和47年2月10日第3種郵便物認可
1979年9月1日発行(毎月1回1日発行)
昭和53年11月24日国鉄首都特別扱承認雑誌
第4158号

ちいさい なかま

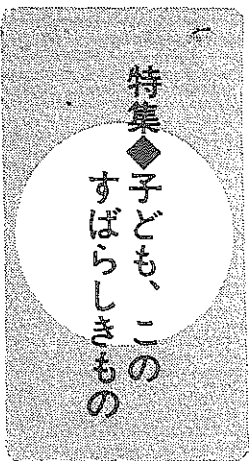
特集

子ども、この
すばらしきもの

NO.100—1979

9 月号





ちいさいなかま

9 月 号
目 次

| | | |
|-----------------------------------|---------|----|
| とびら 詩 | ながはまむつみ | 1 |
| わが幼き日 | 大牟羅 良 | 4 |
| 異邦人かのように | | |
| 方) 先生! わからんの! | | |
| 「はっちゃんのことを真剣に考えるようになったほく」(捫垣泉) がで | 丹羽 徳子 | 38 |
| 〔綴 きるまで | | |

人間、このすばらしきもの

古在 由重 7

希望 西村 滋 14

ぼくのおくすりまだ? 東海大学病院小児病棟 18

いまお山の教室で ひらお幼児教室運営委員会 24

あせるなよ、せんせい 片桐あい子 22

僕の学級 藤田 俊二 28

お母さん主婦失格ね 横田 昌子 32

子育て奮戦記

すごい! ママは男か! 山崎 和子 86

保育相談室

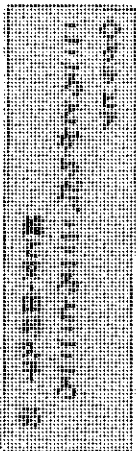
朝ごはんが食べられない 遠山由紀子 80

●子どもと健康

赤ちゃんの下痢と便秘 今村 雄一 62

●食生活を見直す

化学調味料を安易に使うと 安藤 節子 60



わたしたちの歳時習俗・十五夜 矢島せい子 6

女性の生き方

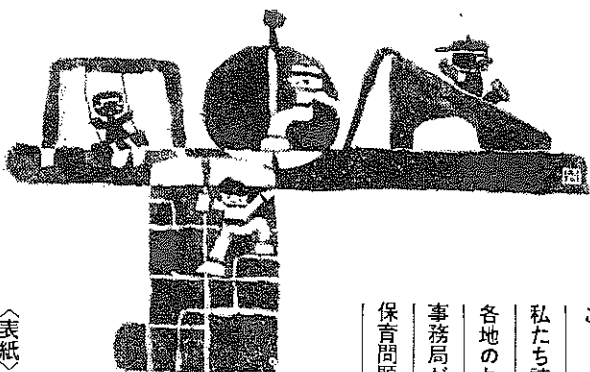
私は保母になりたかった

帯刀 貞代 84

保育行政とわたしたちの運動

無認可保育所と公費助成

五十嵐文子 98



〈表紙〉西巻茅子(構成) 広瀬郁
〈カット〉園房江/五十嵐正克/西岡周造/沼野正子/岡本力

| | | |
|--------------|-------|-----|
| □民主保育の歴史のなかで | | |
| 伊勢湾台風とヤジエセツル | | |
| メント保育所 | 土方 弘子 | 90 |
| ほんたて・ミニ書評 | | 76 |
| こ え 50 | | |
| 私たち読者会 | | 95 |
| 各地のたより | | 96 |
| 事務局だより | | 102 |
| 保育問題日誌 | | 103 |

| | | |
|---------------------|---------|----|
| 念記 はやく、保母さん | 近藤 幹生 | 52 |
| 記事 こないかなあ | | |
| 号募 生きることのまったただ中で | 白井 恵美 | 56 |
| 100 応 | | |
| ☆インタビュ―西巻茅子さんにきく | | |
| 長男の誕生と『ちいさいなかま』の誕生と | きき手・編集部 | 36 |
| 保育の物語 | | |
| コトバのはたらき | 乾 孝 | 73 |
| なかまの歌 | 峯 陽 | 89 |
| 絵本の部屋 | 選定グループ | 78 |
| 保母と親の健康相談室 | | |
| 生理不順について | 佐々木静子 | 82 |

●特集●
この
子どもの
すばらしきもの

お母さん、主婦失格ね

子育ても保育運動のなかでこそ

横田昌子

同じ悩みの人はいませんか

わたしが保育運動にかかわるようになったのは、だれかれのためでなく、実になまなましい私自身の体験のなかからであり、自分の要求からでした。

昭和三十三年、結婚し、はじめて大阪に住み、まもなく、妊娠。不景気のどん底でしたから、子どもが生まれたら仕事をやめなければならなりません。大阪ではじめてできた家賃の高い団地でしたから、どう考えてみても、一人の給料では生活できない状況で、わたしははじめての子どもを揺籃(ようらん)してしまいました。

あくる年、第三回母親大会の報告集をわたしの家でやり、そこで、たいへん苦勞して子どもを育てている同じ団地の女医さんに会いました。彼女は、毎朝、バスで二停留所もはなれたところまで子どもを預けにいき、それから出勤しているのです。おむつのつみをかかえ、赤ちゃんをおぶって団地を出ていく彼女の姿をまのあたりに

みて、なぜ自分には生むことができなかったのかとくやまれてなりません。わたしは生むのをあきらめられ、みんなで力をあわせたら育てられるんだということを、共同保育所のことや彼女のことで知りました。

「同じ悩みの人はいませんか」と、九〇〇戸ちかい団地にビラをまき、保育所をつくる運動が七、八人のお母ちゃんたちとはじまったのはその後まもなくでした。

生活は苦しかったけれども、子どもを生むために貯金もしました。三十五年長男昭作、六〇年安保闘争の最中に誕生。彼が一歳にならないうちに青森で集団小児マヒが発生し、わたしたちの住んでいる団地でも発生したので、わが子はいまは元氣だけれど、明日はマヒするかもしれないと思うと、いてもたってもいられない気持ちでした。こうした母親たちのせつばつまった運動は、頑固な行政をも動かざるを得ないところまで追いつめたのです。この運動に、わたしは子ども背おっ

て参加。ちいさい子どものいる母親は少なかつたけれど、子どもの問題だからこそ、子どもをかかえながら運動に参加することの大切さを、経験を通して教えられました。

さて、一方、公立保育所設置の運動は、町ぐるみのものになりました。「あんなたちが、はじめてだ。共働きのために、公立保育所をつくってくれ」といつてくるのは」といいながらも、市は四年間つづけた運動におされ、「これは特別です。特例です」と念を押しつつ、三十八年十二月、はじめて産休明け、長時間保育ができる公立保育所を開所しました。そのとき長男は三つ、長女は一歳十カ月。「つくる会」の会員は、四十人をこえていました。

こんなにひどい給食なんてノ

わたしは母親の立場で、大阪の「保育問題研究会」の会員になりました。そして、そこで学びとった集団保育のよさを、家庭の主婦が中心の「つくる会」にも伝えていきたいと考えまし

た。保問研の先生方の協力を得て、「集団保育の必要性」「子どもの健康」「しつけの問題」などのテーマで、読書会や学習会をしたり、サークル活動も行なって、運動はつづけられました。

読書会の臨時保育が砂場にできたり、わたしがにわか保育母になり。こうして、いつも、「子どもにとって何がいいか」をふみはずさない、親にとっても、子どもにとってもプラスになる子育ての共通の場を大切にしながら、保育所づくりの運動はすすめられてきました。

ところがいざ保育所ができて、はいてみると、こんどは、「こんなひどい給食ノ」「こんなひどいおやつノ」とびっくりしたり、がっかりすることのなんと多いこと。わたしたちの願いは大変ぜいたくだとみられはしました。が、ひくい保育水準のなかで、毎日生活している子どもたちが問題をなげかけてくれ、市の行政がこんなことでいいはずがないノ」と、親としての責任を感じ、運動をつづけました。

どんなにがんばってみても、一つの保育所のなかでの運動には限界があります。三十九年、大阪母親大会、保育分科会に集まった人たちのなかから、「年一回だけ悩みを出しあってあとはばらばらになるのではなく、月一回集まりましょう」というよびかけがなされ、集まった三五名が一〇〇円の通信費と名前と住所を書いたところから、大阪保育運動連絡会の動きがはじまりました。月一回の交流の場をつくり、二カ月に一回の機関紙を出すことになりました。

なかでも機関紙を大変重視しました。例会に参加できない、おおぜいの人たちと機関紙を通じて結びあうことができるからです。三人めの娘の生まれるときは流産のおそれがあったり入院、病院で編集会議をやったこともありました。こんなふうに必要な協力があったからこそ、どんなときでも欠かさず発行することができたのです。

機関紙は、大阪の保育運動の歴史を蓄積したものであり、みんなの財産に

なっています。

保育運動は、命をうけつぎ、うけわたしていく、人間が人間らしく生きるための課題をごちゃ混ぜにしたような運動であり、子どもをうみ育てるといふ独自性もっています。ですから教育、文化、住民、労働運動などそれぞれの分野が強まらないと、ゆたかにならない運動でもありません。

毎日のくり返しのなかにある親の、保母のかかえている現実を出発点にして、子どもの出してくる要求と、つき動かしてくれるエネルギーによって保育運動が発展していきます。まさにわが息子、娘は「ちいさいなかま」です。

テストの日ぐらい夕食つくって

子育てと保育運動は、多くの共通点をもっているとわたしは思っています。それは相手の人格を大切に、相手は相手、考えたりしていることをそのままはおかさないで、高まりあい、働きかけあい、要求をぶつけあうものだからです。一面的であ

ったり、マイナス面だけをつついているだけでは、批判する中身は正しくても、その子を、その運動を、かえていく援助にはならないということ、私は子どもに教えられました。

わたし自身、子どもたちにはずい分負担をかけていますから、悩みもたえずあります。でも、それをさけるのではなく、仕事をやめるのではなく、親子でどうやってきりひらいていけるかを考え合います。そのことは、その子たちのしよっていく歴史となり、それによって子どもたちの時代もきりひらかれていくのだと思うからです。

次女のゆりはバスで四停留所もはなれた保育所に行ってきました。最初は「遠くてかなわんなあ」と思っていたのですが、そのうちに「この時間があるから、ゆりといっしょにいられる時間があるんだ」と思えるようになりました。にとつたのしい時間になりました。

高校生の長女の多喜から、わが家が全員集合する朝食のときに、「お母さん、ほんとに主婦失格ね」「テストの

ています。

わたしは、大多数の人びとが納得できる運動をすすめられるとき、大きく解決できる時代にはいっていると思っています。

革新自治体は後退したけれども、保育運動は全国各地で着実に前進しているし、保育センターはふえてきているし、「ちいさいなかま」は一〇〇号をむかえました。たりない点はいっぱいあるけれど『ちいさいなかま』がふえていることは、それは子どもが守られることだし、働くお母さんたちが胸は

日ぐらい夕食つくってほしいわ」と言われてしまいました。心がチクッといたみます。「子どもにごはんぐらいたいてやりたい」それはわたしの気持ちでもあります。そんなとき私は、つっぱらないで「ほんとにそうね、お母ちゃんもいっしょにごはんたべたいわ」と言います。子どもの前では私は意外に素直になれるのです。

子どものストレス、母親に対する不満が爆発するとき、私はむしろホッとします。子どもががまんして「お母ちゃん大変だね、がんばっているね」とだけ言っているのは不自然なことだし、子どもなりに「お母ちゃんにこうしてもらいたい、いっしょにいたい、たべたい」と要求をぶつけてくるのはごくあたりまえのことだと思ふからです。

夢中になってやっているうちに、白髪もふえ、息子もあと一、二年で「ちいさいなかま」からわたしたちおとなの「なかま」になります。

先日、テレビの「マー姉ちゃん」で

学徒出陣のところが放映されていました。自分と同年齢の青年が学業をやむなく放棄して戦場に向かう行進をみて、息子なりに怒りを感じたらしく、再びこうあってはならないことを、私と真げんに語り合いました。

わが子はいい子に育ったはず

大阪の保育運動も最初の五年は専従者も事務所もなく、次の五年間は専従者たちとの間借り、十年め、みんなの力で保育センターができて、十五年めの今年はあらたな夢をふくらませ



って働けるだろうし、保母さんたちは自分のやっていることに意義を見出せるだろうし、家庭にいて子育てをしているお母さんも一人ぼっちではなく、開けられる時代だからこそ、だれかがきめてくれるのではなく、わたしたちがきりひらいていかななくてはならないし、そのところに子どもたちもいっしょに立っているのです。

子どもにはいたらない親だったけれども、こうした過程で親のなかも、子どものなかもつくれました。私が一人でがんばって、「わが子、わが子」とだけ考えて育てたより、ずっといい子に育ったはずだといまは確信しています。なぜなら、この間にふれ合っているいろいろな人たちから、子どもたちはそれぞれにすばらしいものをもらっているはずと信じられるから。

(大阪、保育運動連絡会副会長)

(この稿は、横田昌子さんからお話をうかがって、編集部がまとめたものです)